

# 文化財を訪ねて ―見てある記―

## ご存じですか？ 「疎開保育園」

太平洋戦争末期の昭和19年（1944）11月。現在の品川区にあった戸越保育所と、墨田区にあった愛育隣保館の保育士11人、保育園児53人が、現在の蓮田市高虫にある妙楽寺に疎開したことにより、園児らの命が救われたという史実があります。疎開の際には、最寄りの桶川駅から妙楽寺までの約6キロの道のりを歩いて移動しました。

この出来事は、久保つぎこ氏によってノンフィクション小説『君たちは忘れない 疎開保育園物語』として取り上げられ、平成31年（2019）には「あの日のオルガン」として映画化されました。桶川

市でも、映画が公開された年に、桶川市民ホールで上映し、多くの市民が鑑賞しました。

戦時下で人々の行動が制限されているなか、国や自治体の指示ではなく、保育士たち自らの判断で「疎開保育園」が決行されたことは、当時としてはありえない出来事でした。

なぜ、保育士たちは自主的な判断で保育園の疎開を決行することが出来たのか、当時の資料や聞き取りなどから「保育士の深い教養」が、後世に残る決断につながった大きな要因なのではないかと推察します。

決断につながった背景として、戸越保育所、愛育隣保館とも、現在の上皇陛下の誕生を記念して設立された、保育に関する総合研究所「恩賜財団大日本母子愛育会」に移管されたことが影響したと考

えます。この2つの保育園の母体が、国などではなく、研究機関に移管したことにより、保育士たちの意見が比較的反映されやすかったことに加え、そこで働く保育士たちが、客観的に物事を判断できる知識や思考力を持ち合わせていたことが大きな要因として推察した理由です。

過去の判断を現在において評価するのは、適切ではありませんが、東京都が疎開保育園の設置を始めたのは、戸越保育所・愛育隣保館の疎開から約半年後で、昭和20年（1945）3月10日の東京大空襲の後のことでした。

戦争一色のなか、保育士たちが自らの意思に従って行動した結果、東京大空襲から53人のかげがえのない命が守られました。

閩文化財課 ☎ 786・4009



▶ 映画『あの日のオルガン』を支える蓮田市民の会」主催で、桶川駅から妙楽寺まで歩くイベントの様子（令和7年12月13日）

◀ 同イベントでは、疎開保育園児の1人である若狭(わかさ)輝夫(てるお)さん（桶川市内在住）の講話もありました。

